

### 3) セタシジミ種苗生産放流実証試験

井戸本純一・氏家宗二・的場 洋

【背景】セタシジミの種苗生産技術は、地域特産種増殖技術開発事業（昭和63年度～平成4年度）においてD型仔貝量産のための基本的な技術が確立された。しかし、D型仔貝には有効な標識方法がなく、放流後の分散も大きいため、実際の琵琶湖で放流効果を証明するためには事業規模に準じた大量の種苗放流が必要であることが判明した。

【目的】種苗生産技術を漁業者に移転し、その実用性、安定性を実証する。生産した大量の種苗を実際の漁場に放流し、その効果を実証する。

#### 【成果概要】

1. 滋賀県真珠母貝漁協安土事業所に採卵槽等を設置し、種苗生産と放流を委託。
2. D型仔貝生産量（カッコ内は計画）は、平成5年度には5.8億（5億）個体、平成6年度には7.6億（10億）個体、平成7年度には14.4億（15億）個体となり、目標をほぼ達成することができた。
3. 卵からD型仔貝までの歩留まりは、平成5年度から順に平均で24%、47%、36%となり、水産試験場の平均値（約50%）よりもやや低かった。
4. 生産したD型仔貝のほぼ全部を、近江八幡市長命寺沖の漁場内に放流した。
5. 放流地点の周辺水域では、その外周水域とくらべて採集貝の殻長組成において平成6年度の調査では1<sup>+</sup>年貝の増加が、また平成7年度の調査では1<sup>+</sup>年貝と2<sup>+</sup>年貝の増加が認められ、放流による効果と考えられた。
6. 放流地点周辺水域における各年級群の生息量を算出し、殻長組成における増加率から放流貝の現存量を推定したところ、平成5年度放流貝の生残率は1<sup>+</sup>年貝までが3.5%、2<sup>+</sup>年貝までが1.6%、平成6年度放流貝の生残率は1<sup>+</sup>年貝までが1.8%となった。

【成果の活用】簡易な設備の整備だけでD型仔貝の量産が可能であることが実証されたことにより、沿湖に既存の設備を利用した種苗生産、放流事業の実施が可能と考えられる。

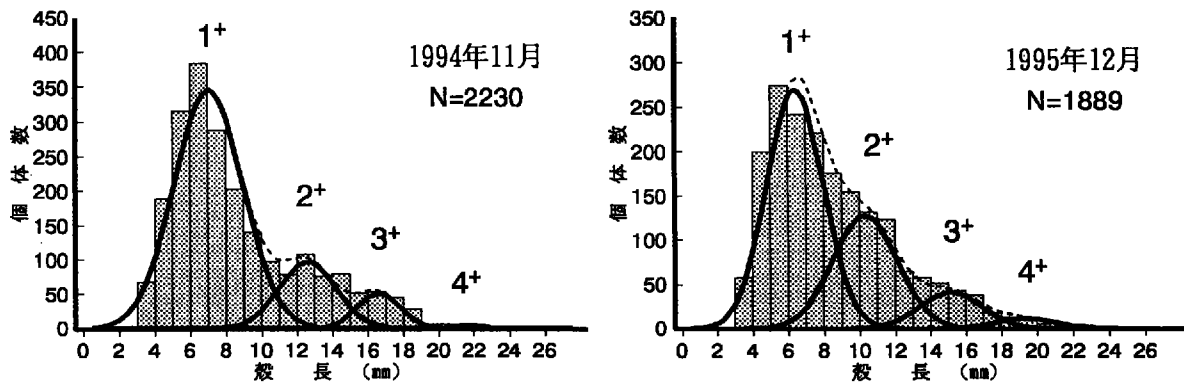


図1 長命寺沖のD型仔貝放流水域で採集されたセタシジミの殻長組成.

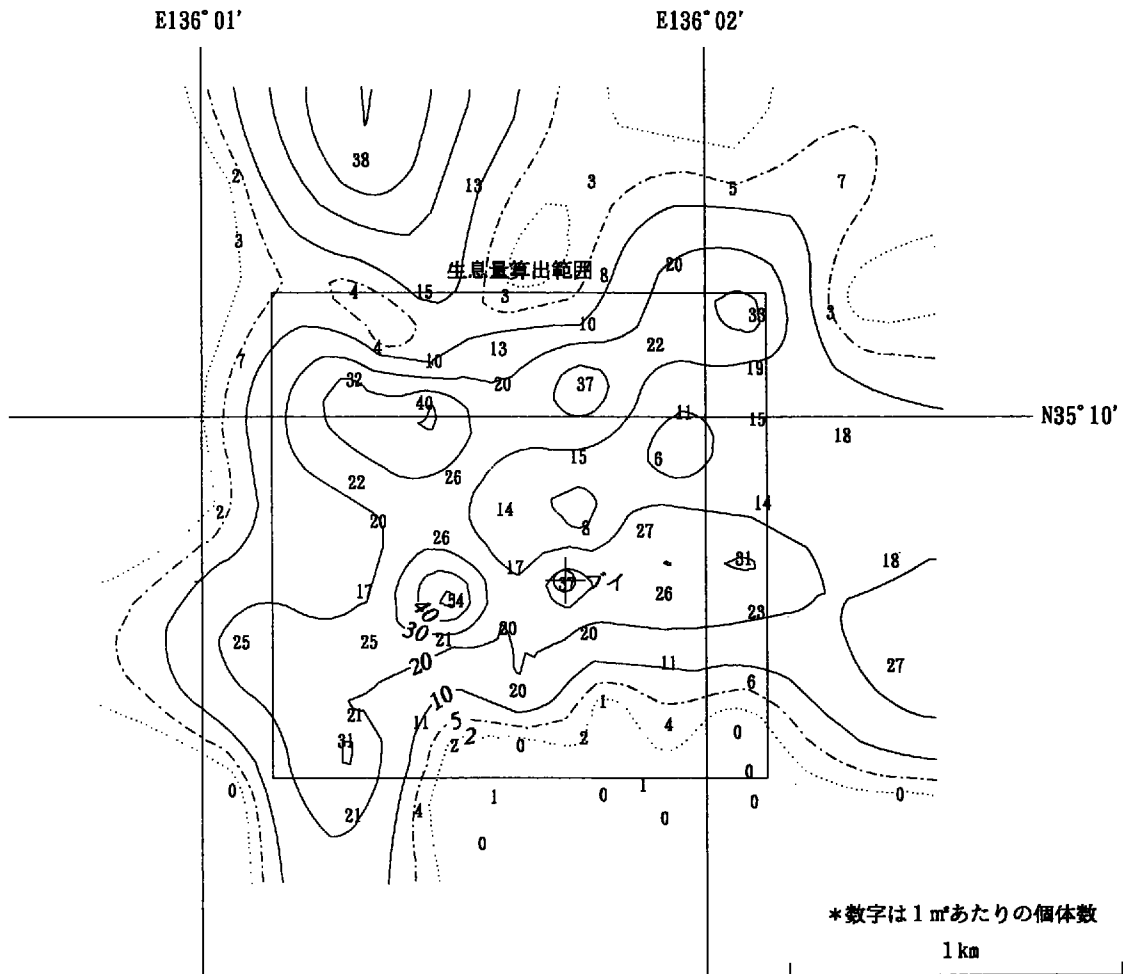


図2 長命寺沖のD型仔貝放流水域における1+年貝の分布 (1995年12月)